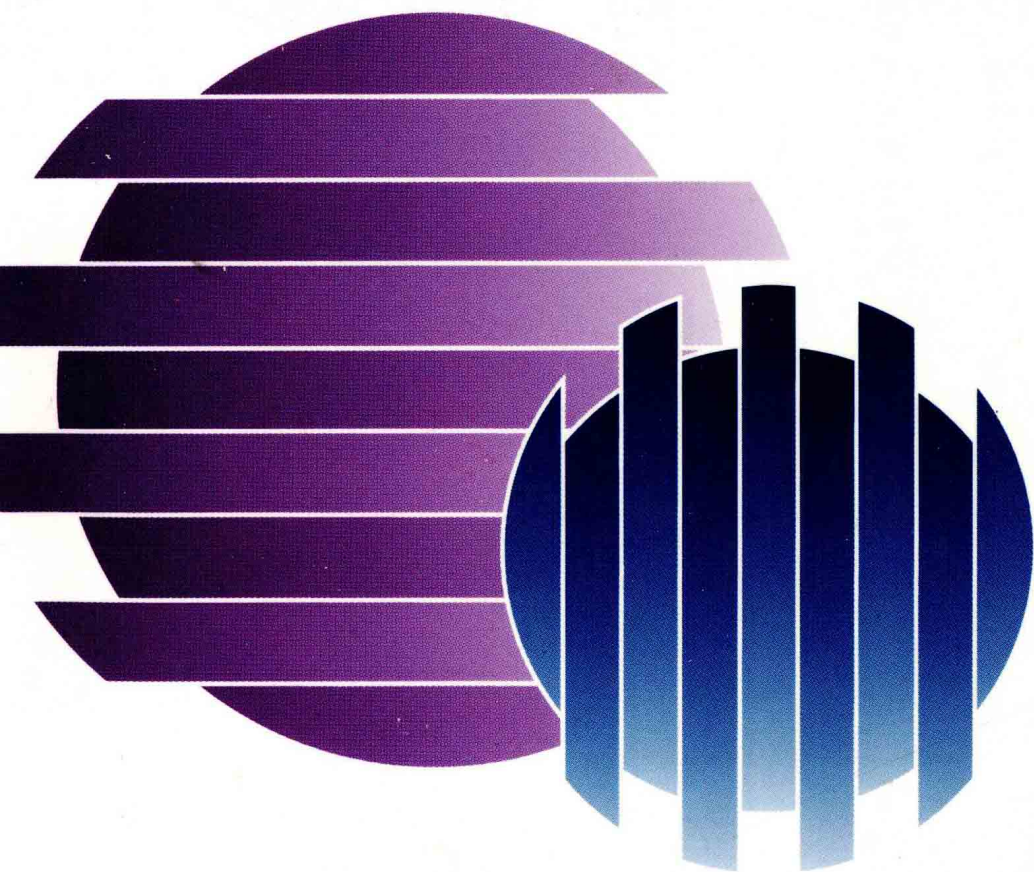


英文法の再発見

Rediscovering English Grammar

日本人学習者のための文法・語法の解説と練習問題

ブレント・デ・シェン 著



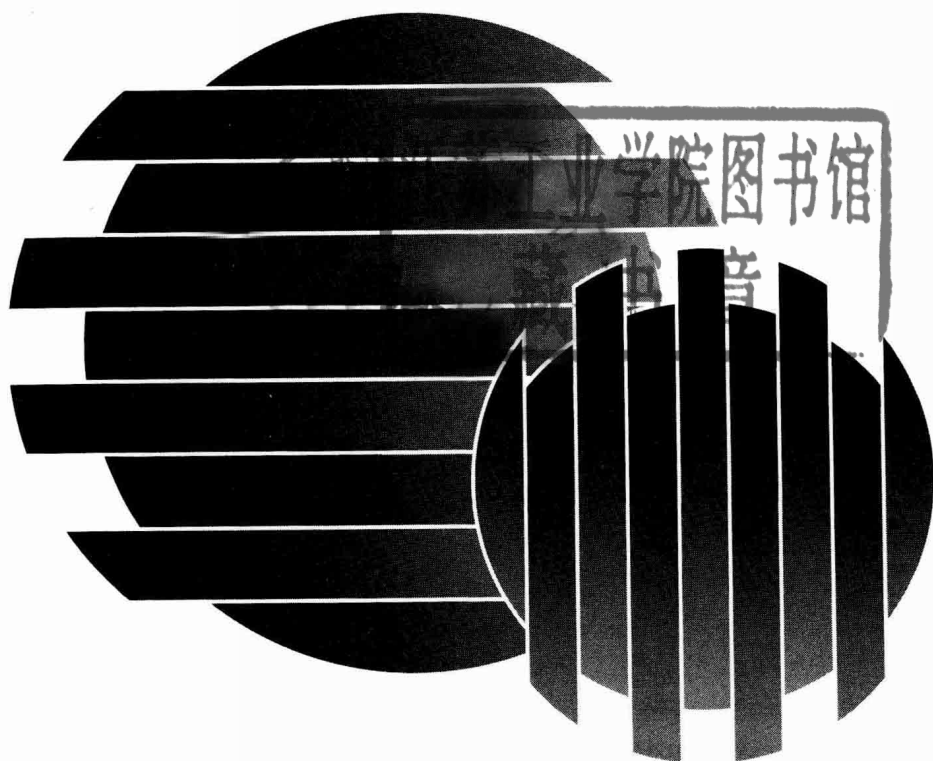
研究社出版

英文法の再発見

Rediscovering English Grammar

日本人学習者のための文法・語法の解説と練習問題

ブレント・デ・シェン著



研究社出版

著者紹介

ブレント・デ・シェン(Brent de Chene) 1948年米国カリフォルニア州生まれ。1970年ハーバード大学卒業、1979年カリフォルニア大学ロサンゼルス校言語学博士号取得。1978年から1981年まで米国で言語学を教え、1981年来日。現在、早稲田大学教育学部教授。著書: *The Historical Phonology of Vowel Length* (Garland, 1985), 論文: “Compensatory Lengthening” (共著, *Language* 55, 1979), 「形態音韻論における心理的実在性——日本語の動詞の場合」(『ことばからみた心——生成文法と認知科学』, 東京大学出版会, 1987), “Notes on Focus and Quantifier Scope in English” (『太田朗先生傘寿記念論文集』, 大修館書店, 1997) など。



KENKYUSHA

〈検印省略〉

英文法の再発見

Rediscovering English Grammar

日本人学習者のための文法・語法の解説と練習問題

1997年9月24日 印刷 1997年10月1日 初版発行

著 者 ブレント・デ・シェン
発 行 者 浜 松 義 昭
印 刷 所 研究社印刷株式会社

発 行 所 研究社出版株式会社

〒102-8712
東京都千代田区富士見 2-11-3
(編集) 03(3288)7755 (代)
電話 (販売) 03(3288)7777 (代)
振 替 00170-2-83761 番

ISBN 4-327-42142-1 C1082

Printed in Japan

まえがき

英語を扱う大学の科目は、「学問的」である英語学関連のものと、「実践的」といえる語学学習関連のものに、大きく分けることができる。英語学関連の科目は、研究成果を学生に伝えることが主な目的であり、語学学習への配慮はさほど必要とされない。一方、語学学習関連の科目は、学生の語学力を伸ばすことが第一の目的であり、英語学の研究成果との関係は間接的である。

しかし、英語学の科目とも語学学習の科目とも違うもう1つの科目の種類が考えられる。「学問的実践科目」とも呼ぶべきこの科目類は、研究成果に言及しつつ、学生の語学力向上を目的とするという意味で、学問的、実践的双方の側面があり、その両面性を特徴とする。歴史言語学の分野から例をとれば、(印欧祖語の)特定の語根を共有する英単語群の考察を通して、学生に語彙に関する知識を整理・拡大させることを目的とする「英語語彙の印欧語起源」という科目が考えられるであろう。

本書は、こうした「学問的実践科目」の教科書として考案された。すなわち、英語学、一般言語学の研究成果をふまえ、そこから英語の間違いやすい点を分析することにより、学生の英語力の拡大を図る本である。それに加え、日本語を母語とする人の英作文などに頻繁に見られる誤りを取り上げ、必要に応じて日英語比較を行い、そして各章の終わりにある練習問題の焦点を和文英訳にしているという意味で、本書は日本人専用の教科書といえよう。

本書の構成についてももう少し詳しく知っていただくために、日本人の英作文などに見られる「典型的な間違い」の例を挙げよう(例文(1)-(2))。

- (1) *Sue was taken away her driver's license. (第8章を参照)
- (2) *Frozen food is hard to go bad. (第20章を参照)

このような(多くの場合に日本語の特徴に起因すると思われる)間違いを起点に、本書各章の構成を考えた。しかし、そのように章のテーマ(完了形、数量詞、関係節など)を決めてからは、そうした間違いとの関連を問わず、その

テーマに関して学習者に伝えるべきと思われる内容を網羅する文章を書こうと試みた。(第5章, 第13章は多少例外的である。)

また, 例文(1)-(2)のような間違いを考えてみるその過程において, 英文法の主だった領域にも触れようと努めた。これにより, 本書が扱う文法項目はかなり広範囲にわたるものになったと思う。特に以下の7つの分野を集中的に扱った。

- 1 語形成, 意味役割, 事態の分類(第1-3章)
- 2 完了, 法の助動詞(第4-5章)
- 3 受動化, 与格交替(第6-9章)
- 4 冠詞, 数量詞(第10-12章)
- 5 従属節1 副詞節(第13-14章)
- 6 従属節2 関係節(第15-16章)
- 7 従属節3 補文(「名詞節」)(第17-20章)

したがって, 本書がテキストとして最も有用と思われる科目は英文法を取り扱うものであろうが, 用例の多さを考えれば, 語法の教科書にも適している。そして和文英訳が焦点の1つとなっているので, 多人数を対象とする初級の英作文のテキストとしても活用できる。もっとも, 「誤用分析」という科目があればそれが最適かもしれない。

以上は, 英文法などの授業を履修している大学生およびその指導教員を读者対象として想定して述べたものである。しかし, それに加え, 研究所や専門学校, 予備校, 高等学校などで英語の教員を勤めている先生方に, 本書を参考にしていただければ幸いである。そして英語に関心をお持ちの一般読者も, たとえ本文を丁寧に読む時間はないとしても, 各章の和文英訳の練習問題を解くことにより, 英語力の自己点検を行うことができる。(各章の「はじめに」を読んだ段階でその章の和文英訳の練習問題を「予備試験」として解いてみることは, 本書をテキストとして読んでいる学生にもおすすめしたい。)

本文では, 参考文献への言及をなるべく控えたので, 以下, 章によって特に参照させていただいた文献を紹介する。

- 第1章 Marchand 1969
- 第2章 Kuno 1973
- 第3章 Dowty 1979
- 第4章 McCawley 1981
- 第6章 Jackendoff 1972, Davison 1980
- 第7章 Jackendoff 1990, Andrews 1985

- 第 8 章 Shibatani 1990, Miyagawa 1989
- 第 10 章 Quirk et al. 1985
- 第 11 章 McCawley 1988
- 第 12 章 Carlson 1981
- 第 15 章 Radford 1988
- 第 16 章 Radford 1988
- 第 17 章 Chomsky 1981
- 第 18 章 Stowell 1982
- 第 19 章 Koopman and Sportiche 1991
- 第 20 章 Chomsky 1986, Kaneko 1996

全般にわたって、用語や文体に関しては、Araki and Yasui 1992 および Nakamura, Kaneko, and Kikuchi 1989 を参考にさせていただいた。また、Power, Oshitani, and Iwata 1983 および Webb 1987 からは数多い貴重なヒントをいただいた。裏表紙の「各章のトピックから」の考えは、大修館書店の『新英文法選書』からお借りした。

本書の本格的な執筆は 1994 年 7 月から 9 月および 1995 年 3 月から 5 月の 2 期に分けて行った。それによって出来上がった草案は、1996 年 4 月からの 1 学年の授業で教材に用いながら、継続的に書き直しや書き足しをした。しかし、私の「典型的な間違い」への関心は、来日した 1980 年代前半にさかのぼる。おもしろい誤用を盛り込んだ作文を書いてくれたその当時の学生(津田塾大学、立教大学、宇都宮大学)をはじめ、本書の長い形成期間の間にお世話になった数多い方々に感謝を表したい。早稲田大学の学生は、解説文のない練習問題や断片的な説明に耐え、鋭い質問や指摘をしてくれた。第 2 章の内容に関しては、索引の作成に際してもご尽力をいただいた大羽良氏に、そして第 14 章の内容に関しては、Derek Herforth 氏に重要な助言をいただいた。そのほか、Christopher Tancredi 氏、松坂ヒロシ氏、吉田恵以子氏、新井和泰氏、湯舟英一氏とも有意義な対話を持たせていただいた。

1991 年 8 月に、財団法人言語文化研究所・東京日本語学校主催の講演会および財団法人語学教育研究所主催の講演会で、本書の内容を一部紹介する機会を得た。両研究所に厚く御礼申し上げたい。また、本書後半の草案を集中的に書き上げることができた 1995 年 3 月から 5 月までの 3 ヶ月間は、早稲田大学から与えられた在外研究期間の一部であり、同大学にも感謝を表したい。

出版に際しては、日本語を母語としない私の込み入った文章を調整するという手のかかる仕事を、研究社出版出版部の金子靖氏にお願いしなければな

らなかった。金子氏はこの仕事を辛抱強くこなしてくださった。同氏の各段階にわたるご助力がなければ、本書の出版は不可能であった。また、校正の折りに同出版部の高見沢紀子氏および前述の大羽良氏にさまざまなご指摘をいただいた。併せ記して各氏に謝意を表する。そして、各章の草案にいち早く目を通され、作業の各段階において数々の貴重なコメントやアドバイスを賜った鈴木英晶氏に格別の感謝を表したい。鈴木氏の絶え間ないご支援および励ましなしには本書は完成できなかったであろう。

最後に、本書を、私に職を与えてくれた日本の英語教育界へのささやかな恩返しと見なしていただければ幸いである。

1997年7月

ブレント・デ・シェン

記 号 表

文の容認可能性の度合いに関する記号

- ? ややおかしい
- ?? かなりおかしい
- ?* 非文(容認不可能)に近い
- * 非文(容認不可能)

統語範疇(構成素)

- N (noun) 名詞
- V (verb) 動詞
- A (adjective) 形容詞
- P (preposition) 前置詞

- NP (noun phrase) 名詞句
- VP (verb phrase) 動詞句
- AP (adjective phrase) 形容詞句
- PP (prepositional phrase) 前置詞句

- S (sentence) 補文標識の位置を含まない節
- S' 補文標識の位置を含む節
- X 範疇の変項

ゼロ範疇(空範疇)(第 15～20 章)

- t (移動による)痕跡
- PRO 不定詞, 動名詞の(痕跡でない)ゼロ主語
- pro (日本語で見られる)ゼロ代名詞
- O ゼロ関係代名詞
- φ その他のゼロ範疇および性質を問題としないゼロ範疇

論理学記号(第 11～12 章, 第 16 章)

$\forall x$	普遍数量詞	(「すべての x について」)
$\exists x$	存在数量詞	(「ある x について」)
Mx		(「多くの x について」)
NEG	否定の演算子	(「... ということはない」)
POSS	可能性の演算子	(「... ということは可能である」)

M	命題の変項
$M \wedge M'$	M かつ M'
$M \leftrightarrow M'$	M と M' は真理値に関して等値である
Q	数量詞の変項
P	一項述語の変項
R	二項述語の変項

$\{x\}$	すべての x の集合
$a \in \{x\}$	a は $\{x\}$ の一要素である
$\{x P(x)\}$	$P(x)$ という条件を満たす x の集合

その他の記号

$\times$	誤訳
$[X]$	X を訳さずに(練習問題)
(X)	X は随意的である
$_$	与えられた記号に対する位置を示す
例 $X_$	X の後
$_X$	X の前
X_Y	X と Y の間

目 次

まえがき	iii
記号表	vii
第 1 章 抽象名詞と形容(動)詞, 英語語形成の概観	1
はじめに	1
1.1 形容詞の一般論および日英語比較	1
1.2 英語語形成の概観	3
練習問題	8
第 2 章 心理動詞と心理形容詞	10
はじめに	10
2.1 意味役割	10
2.2 日英語比較	12
練習問題	18
第 3 章 有界性と事態の分類	20
はじめに	20
3.1 有界性, 無界性の基準	20
3.2 日英語比較	22
練習問題	25
第 4 章 完了(現在完了と単純過去の区別を中心に)	27
はじめに	27
4.1 一般論および副詞の分類	27
4.2 使い分けを決定する要因 その1(副詞)	28
4.3 使い分けを決定する要因 その2(実現可能性)	30
4.4 過去の使用範囲と完了の使用範囲が重なる場合	33
4.5 過去完了	34

練習問題	37
第 5 章 法助動詞の諸問題	38
はじめに	38
5.1 going to と will	38
5.2 could	40
5.3 should と must	42
練習問題	44
第 6 章 動詞の目的語と前・後置詞の目的語, 受動化	45
はじめに	45
6.1 日英語比較	45
6.2 英語における「動詞の目的語」	47
6.3 英語の受動化	49
6.3.1 環境 V _	49
6.3.2 環境 V P _	52
6.3.3 環境 V X P _	54
練習問題	55
第 7 章 授与動詞と与格交替	57
はじめに	57
7.1 概観と動詞の分類	58
7.2 二重目的語構文における動詞の目的語に対する制約 ..	59
7.3 二重目的語構文における動詞に対する制約	62
7.4 義務的な二重目的語構文	63
7.5 二重目的語構文と受動化可能性	64
練習問題	66
第 8 章 日本語受動態の英訳	68
はじめに	68
8.1 日本語の間接受動態と直接受動態	68
8.2 直接受動文の英訳	70
8.2.1 受動文としての英訳	70
8.2.2 have + 受動態小節 (passive small clause) の構文 ...	72
練習問題	76

第 9 章	不定の主語	78
	はじめに	78
	9.1 by 句のない受動文	78
	9.2 不定人称代名詞	81
	練習問題	83
第 10 章	冠詞と定性	85
	はじめに	85
	10.1 冠詞の基礎知識	85
	10.2 定性	86
	10.3 定冠詞の使用条件	88
	10.4 関連問題	92
	10.4.1 名詞句の総称的用法における定冠詞	92
	10.4.2 look for や find の目的語における定性	92
	練習問題	95
第 11 章	数量詞 (1)	97
	はじめに	97
	11.1 英語数量詞の分類	97
	11.2 普遍数量詞の位置交替	99
	11.3 日英語比較	101
	11.4 数量詞文の論理学的表示	103
	練習問題	105
第 12 章	数量詞 (2)	106
	はじめに	106
	12.1 否定と数量詞との相互作用	106
	12.2 every と any	110
	練習問題	115
第 13 章	副詞的表現の諸問題	117
	はじめに	117
	13.1 「うちに」, 「うちは」	118
	13.2 「かぎり」	119
	13.3 「かわりに」	120

13.4 「以外」	120
13.5 「以来」	123
練習問題	125
第14章 条件文	126
はじめに	126
14.1 叙實的, 開放, 反事實的な補文や副詞節	126
14.2 英語の条件節	127
14.3 条件節と帰結節の組み合わせ	130
14.4 日英語比較	131
14.5 仮定的な条件節および英語条件文における曖昧性	133
練習問題	135
第15章 関係節(1)	137
はじめに	137
15.1 序論——音声と意味	137
15.2 移動規則と痕跡	139
15.3 移動規則の裏付け	140
15.4 関係節における前置詞	142
練習問題	144
第16章 関係節(2)	145
はじめに	145
16.1 関係詞 that とゼロ関係詞	145
16.2 制限的, 非制限的關係節	148
練習問題	152
第17章 不定詞補文	154
はじめに	154
17.1 不定詞補文をとる動詞の分類	154
17.2 S 不定詞補文と S' 不定詞補文の相違点	158
17.3 主語コントロールと目的語コントロール	160
練習問題	163
第18章 不定詞と動名詞の時制	164
はじめに	164

18.1	S' 不定詞補文と S 不定詞補文の時制	164
18.2	動名詞の時制	166
18.3	動名詞関連の諸問題	169
	練習問題	171
第 19 章	コントロールと繰り上げ, 形容詞の不定詞補文	173
	はじめに	173
19.1	コントロールと繰り上げ	173
19.2	不定詞補文をとる形容詞の分類	178
	練習問題	182
第 20 章	ゼロ目的語補文	183
	はじめに	183
20.1	主語コントロール補文とゼロ目的語補文	183
20.2	ゼロ目的語補文における前置詞残留	186
	練習問題	189
参考文献		191
索引		193

第1章 抽象名詞と形容(動)詞, 英語語形成の概観

はじめに

同一の日本語の単語が, 英語の形容詞に対応したり, 英語の抽象名詞に対応したりすることがある。本章では, このような単語の英訳を検討してから, 英語の形容詞と抽象名詞の派生関係を明確にするため, 英語の語形成, 特に主な派生接尾辞を概観する。

1.1 形容詞の一般論および日英語比較

名詞と動詞との区別は, あらゆる言語で認められると思われるが, この2つの品詞(または語彙範疇 (lexical category)) とも違う「形容詞」という品詞の存在は, 普遍的ではない。典型的な名詞がものに言及し, 典型的な動詞が出来事を表すのに対して, 典型的な形容詞は状態を表すと言えるが, 状態を表すことは名詞も動詞もできる。

「形容詞」という品詞を認める言語においても, その形容詞が言語によって名詞に類似したり動詞に類似したりする。英語の形容詞は, 活用の面では名詞とも動詞とも違う (empty_A, emptier, emptiest 対 empty_N, empties および empty_V, empties, emptied, emptying (A,N,V はそれぞれ「形容詞」, 「名詞」, 「動詞」を示す))。しかし, そのまま述語にはなれず, 叙述的用法には動詞 be が必要であるという点では, 英語の形容詞は動詞にではなく, 名詞に似ている。

日本語においては, 状態を表すというのが主な役割である品詞は形容詞と形容動詞の2つがある。厳密な意味での形容詞は, 活用の面では動詞に類似している(例えば, 動詞「書けば」kak-eba, 形容詞「高ければ」taka-ker-eba)。それに対して, いわゆる形容動詞は名詞と同様に, 断定の助動詞(連結詞

(copula))「だ」が付加されることによって述語になるという意味で、活用の面では名詞に類似している(例えば、名詞「先生なら(ば)」, 形容動詞「静かなら(ば)」). 形容動詞の活用が名詞のそれと違う点は連体形である(先生の(=である)山田さん, 静かな(=である)山田さん).

形容詞とそれに対応する抽象名詞は、形容詞語幹(stem, 1.2を参照)に「さ」という接尾辞が付くことによって区別される(高-い, 高-さ). 形容動詞も「さ」(または「性」)をとって抽象名詞になることが多い(穏やか-さ, 知的-さ, 不規則-性/さ). しかし, 「健康」, 「安全」, 「幸福」などのように, 同一の単語が抽象名詞としても形容動詞としても使われうるという例も多い(注1, 例文(1)-(2)).

- (1) a. 最も大切なのは健康だ. (名詞)
- b. 健康を保ちたい. (名詞)
- (2) a. 彼は年の割には健康だ. (形容動詞)
- b. ジムは健康な子だ. (形容動詞)

この現象は和文英訳(または日本人による英作文)にあたって問題を引き起こすことがある. なぜなら, 英語では形容詞とそれに対応する抽象名詞とを必ずと言っていいほど形態的に区別しているからである. 例えば, (1)の「健康」が英語の health に対応するのに対して, (2)の「健康」は英語の healthy に対応する. 抽象名詞にも形容動詞にもなる単語を英訳する際に, 形容詞を使うべきところに抽象名詞を使うことが典型的な間違いと言えよう.

形容動詞にも抽象名詞にもなる単語が, どちらの品詞として用いられているかということは, 感覚でわかる人が多いであろうが, 形容動詞か名詞かがどのように確認できるか, 次の3つのケースに分けて検討してみよう.

まず, 例文(3)の「安全」のように, 問題の単語が名詞を修飾したり, 副詞に修飾されたりする場合, その単語が形容動詞であることは間違いない.

- (3) これは完全に安全な建物だ.
This is a completely safe building.

次に例文(4a)-(4b)の「安全」のように, 問題の単語が形容(動)詞に修飾されたり所有者を持ったりする場合や, 格助詞が付いている場合には, その単語は逆に名詞であると判断できる.

- (4) a. 完全な安全が求められた.
Complete safety was demanded.

- b. あの火山は住民の安全を脅かしている。

That volcano threatens the residents' safety.

最後に、形容動詞にも抽象名詞にもなる単語 X が、修飾語や所有者なしに叙述的(述語的)に使われている「NP は X である」という構文を考えよう。その場合、X が形容動詞か抽象名詞かを区別するためには、例文(3)~(4)で使ったのとは違う基準が必要になる。そこで、「NP は X である」の X が形容動詞の場合には、その文を「X な N である」(N は NP の主要語)と言い換えられ、X が抽象名詞の場合には「X が NP である」と言い換えられることを基準として使うこととする。その言い換えの基準を例文(5)にあてはめてみよう。

- (5) a. 彼の人生は幸福だった。 His life was happy.
b. 彼の目的は幸福だった。 His goal was happiness.

例文(5a)は「幸福な人生だった」というように言い換えられるが、「幸福が彼の人生だった」というようには言い換えられない。その結果、(5a)の「幸福」は形容動詞であることがわかる。例文(5b)は逆に「幸福が彼の目的だった」というように言い換えられるが、「幸福な目的だった」というようには言い換えられないので、(5b)の「幸福」は抽象名詞であることがわかる。

1.2 英語語形成の概観

以上、形容詞の一般論を考えてから、名詞としても形容動詞としても使える日本語の単語の、それぞれの使用法を見分ける方法を検討してきたが、これからは英語の抽象名詞とそれに対応する形容詞の派生関係を考えることをきっかけに、英語の語形成(word-formation)を概観することにしよう。単語の構造を研究対象とする言語学の下位分野の1つである形態論(morphology)の背景知識を紹介してから、(1)名詞や形容詞から動詞を作り出す接尾辞、(2)名詞から形容詞、形容詞から名詞を作り出す接尾辞、そして(3)動詞から名詞、動詞から形容詞を作り出す接尾辞と見ていく。

形態論の部門の1つは、主には活用(conjugation)と曲用(declension)からなる屈折(inflexion)であるが、屈折範疇の特徴は、品詞の変更をもたらさないということのほか、(1)造語力(productivity, 原則としてある品詞のあらゆる語にあてはまること)と、(2)意味論上の規則性という2点であると考え